

目加田誠先生の『北平日記』 5

今回は目加田誠先生が中国で出会った人々を取り上げます。銭稻孫（せんとうそん）氏は先生が留学中に最もお世話になった人、兪平伯（ゆはいはく）氏は先生が会見を熱望し、尊敬していた文学者のようです。『北平日記』には会見後の大変興奮した様子が書かれています。魯迅（ろじん）氏と周作人（しゅうさくじん）氏は著名な文学者で日本にもファンがいますね。

1. 銭稻孫（せん とうそん）（1887～1966、明治 20～昭和 41）

浙江省呉興の人で、父が外交官であった関係から中学校卒業まで日本で暮らしました。後にイタリアに渡りローマ大学を卒業しています。日本文学者及び翻訳家で、『万葉集』や『源氏物語』などを翻訳したことで知られています。大の親日家で目加田誠氏を初め、多くの日本の留学生の支援をしました。

目加田誠氏は昭和 9 年 11 月 11 日から帰国する昭和 10 年 3 月 4 日まで銭氏の自宅に寄寓しています。『北平日記』昭和 9 年 11 月 11 日条には、目加田誠氏が小川環樹氏ら 6 人に手伝ってもらって引越し、その夜は誠氏が手伝ってもらった人々と銭稻孫氏を招いて宴会を催したことが記述されています。さらに、昭和 10 年 2 月 3 日は目加田誠氏の誕生日に当たりますが、茶わんむしとアヅキ飯を出してもらっています。このように日本人の世話をしましたが、戦後はそれがあだになり文化漢奸として 3 年間獄中生活を送りました。しかし、その後は晩年まで翻訳を通じて日本と関わりを持ちました。

2. 兪平伯（ゆ へいはく）（1899～1990）

浙江省徳清の人。国立北平清華大学中国文学系教授となり、『紅樓夢』の研究で名高い学者です。また、現代文学界の作者としての地位も高い人でした。1935 年（昭和 10 年）2 月 26 日に清華大学で銭稻孫氏の通訳で目加田誠氏と会見し、その内容が『北平日記』同日条と『目加田誠著作集第八巻』に記載されています。会見では、『紅樓夢』を初めとしてさまざまな文学作品や作者について議論が交わされました。目加田誠氏が当時最も尊敬していた中国文学者で同日の日記には、「実に嬉し。嬉しくてたまらず、初めて之程心に

ふるる話をききたり。」と興奮した様子を書き残されています。

俞平伯氏の『紅樓夢』研究の成果である『紅樓夢弁』（上海亜東図書館出版 1923 年）は現在当館でも所蔵していますが、『北平日記』昭和 9 年 6 月 20 日条に目加田氏が購入したと記されたそのものであるかはわかりません。『北平日記』では、6 月 24 日条に「俞平伯の『紅樓夢弁』よみ了（おわ）る。」とあり、400 頁を越える中国語の本をわずか 4 日で読んだことがわかります。

3. 魯迅（ろじん 周樹人）（1881～1936、明治 14～昭和 11）

周作人の実兄で、小説『阿Q正伝』などで有名な作家です。日本に留学しています。当時の支那新文壇の巨星と評価されました。

目加田誠氏は留学先の北平（今の北京）を離れる昭和 10 年 3 月 21 日に上海で小川環樹とともに魯迅と会っています。『北平日記』にそのことは出てきませんが、目加田誠氏の随筆集『随想秋から冬へ』で触れられています。誠氏の感想は、「魯迅さんは小柄な人で、胸をそらし、入り口のドアを押してずっと店の奥まで入って来た。弟の周作人さんとまるで違い、むろんどちらも強い人だと思うけれども、周さんがまるで渾然として玉の如くにこやかな人であるのに対し、魯迅さんは抜き身の槍を下げている様な気魄が感じられ、かえって何か痛々しい気がした程である・・・」と記されています。

4. 周作人（しゅう さくじん）（1885～1967）

浙江省紹興市南水江の人。魯迅（周樹人）の弟です。1906 年に政府から派遣されて日本に留学。法政大学・立教大学で学び、辛亥革命（1911 年）の時に帰国しました。

1924 年から北京大学東方文学（日本文学）系主任教授に就任。兄の魯迅とともに「文学研究会」を組織しました。日本文化に造詣が深く、『古事記』を翻訳しています。『北平日記』第 7 卷昭和 9 年 9 月 30 日条には小川環樹氏と訪問したことが記されています。戦後は日本の協力者として冷遇され、文化大革命（1966～1976 年）の際に自宅に軟禁され亡くなりました。

目加田誠氏には書を贈っています。それは掛け軸として表装されて現在当館で所蔵しています。

祝
天子代り多しと云ふ
泪を

俞平伯氏会見記

昭和十年二月二十六日午後於清華大學

余 余は往來紅樺亭に浮き興味を抱き、一面詞

の研究に興味を有するも也 先生の此の両方研究

究つ紅樺亭辭 徳詞(源氏)と云ふ安眠の境之不

貴下は今尚紅樺亭に從前より如き興味を有せ

らま

俞 然り。此れは紅樺亭辭中に稀したる内題につき、

今日就處の結果又疑を抱かざりしより、

『北平日記』昭和10年2月26日 俞平伯氏会見記